

京都市社会福祉審議会 第4回「ひきこもり支援の在り方検討専門分科会」摘録

○ 日 時

令和2年6月12日（金）午後6時～午後7時30分

○ 場 所

中京区役所4階第1会議室

○ 出席者

（委員）

岡田会長，源野委員，井筒委員，宇川委員，大澤委員，小野委員，中川委員，松山委員，三木委員（欠席 小谷委員）

（京都市）

門川市長

<保健福祉局>

三宅局長，安部局長，西窪部長，徳永室長，出口部長，北川室長，波床所長，関係課長ほか

<子ども若者はぐくみ局>

久保局長，上田室長，伊井担当部長，関係課長ほか

<教育委員会事務局>

関係課長ほか

○ 議 事

（1）ひきこもり支援におけるアートの役割・位置付けについて

中川委員：（資料説明）

（2）ひきこもり支援に係る社会資源及びネットワークについて

和田課長：（資料説明）

井筒委員：ひきこもりの現状と課題，そして今後の方向性の話をいただいた。私は民生児童委員ということで，資料3（2）「今後の方向性（案）」にある「⑥ボランティア活動や地域活動のマッチング」と，別紙「ひきこもり支援に係る社会資源の分布」の「地域」について考えてみた。

別紙に記載される段階のうち「社会参加への準備」から「主体的な社会参加」に該当すると思うが，自治会や学区社協における，チラシの作成やポスティング，公園清掃や花壇を作る活動等に，ひきこもりの方が参加してもらって成果を味わうことにマッチングできるのではと考える。民生児童委員として，直接，ひきこもりの方に関わった経験はあまりないが，ひきこもりの方に対する社会の理解を深めていく，地域住民がひきこもりの方に寄り添えるような気持ちを作って

いくのが地域の役割と考えている。例えば、日曜講座を拡大して、ひきこもりの方を受け入れる状況を作っていきたいと思う。

また、支援調整会議について、イメージ図の「生活困窮者自立相談支援員」のところに「統括相談員」「相談支援員」「よりそい支援員」とあるが、もう少し具体的にそれらの役割について教えてほしい。次に、「コアメンバー」と「必要に応じて出席」と分けてあり、「生活困窮者自立相談支援員」はコアメンバーになるのではないかと考えるが、その点についてはどうか。

和田課長：生活困窮者自立相談支援員の各支援員の役割については、現在、各区役所・支所向けの「手引書（案）」を作成しており、各関係機関も含めた役割を示す予定であり、引き続き検討を進めてまいりたい。

支援調整会議におけるコアメンバーとその他の棲み分けについても、「手引書（案）」の中でも示していくが、各支援機関がどれだけ関わってもらうかについては、各区の実情に応じて、例えば、生活困窮者自立相談支援員や民生児童委員の方がコアメンバーになることも考えられる。

井筒委員：支援調整会議のメンバーは、保健福祉センター長が選ぶのか。

和田課長：センター長が招集する。

ただいまお話しいただいた、地域活動とのマッチングは、重要な御意見と受け止めている。支援を要する方には、チラシ配り等のちょっとしたお手伝いに参加してもらうことで、自己肯定感を高めてもらうことができると考えている。一方、地域の担い手不足が言われる中、地域と支援を要する方の双方にメリットになる可能性があり、マッチングについては、関係局と連携してしっかりと検討してまいりたい。

井筒委員：何よりもまず、地域の理解が必要であると考えており、地域の理解を深めていくところからはじめていきたい。

岡田会長：確かに、世間の認知度を上げていくことが重要と考える。

宇川委員：資料3（1）現状と課題の「ウ 就学・就労」で、子どもに対する学習支援や若者・壮年に対する就労に向けた社会資源は充実しているとの記載があるが、私たち福祉現場に携わる立場の中では、充実しているとは思えない。学習支援では、ヘルパーの方が相当苦労して実施しているし、就労支援においても、働く場所の確保も含め、まだ開拓している状況である。行政が関わるものを中心に充実していると記載されているが、具体的に教えてほしい。

和田課長：実際の支援に関わっている方の御意見として重く受け止めたい。ひきこもりに特化したものを新たに立ち上げるのではなく、既存の社会資源のレベルを高めることで対応することを念頭に、このように記載したものである。

宇川委員：その既存の社会資源にどのようなものがあって、どのように利用されているかを教えていただきたい。

和田課長：手元に持ち合わせていないので、後日、お示しさせていただきたい。

三木委員：中川委員にお尋ねするが、アートに関する活動をされる際に、ひきこもりや障害のある方をどのような形で集めているのか。そこに来る人がアートに関する支援団体やサークルをどのようにして見つけるのか、そのためにどのように工夫されているのかを教えていただきたい。

中川委員：まだまだ実績が少ない。慢性的にひきこもっている方にいきなり出てきてもらって、マンツーマンで関わることは不可能である。支援の段階がある程度進み、社会参加が視野に入った際に、入っていける居場所があれば参加できるのではないかと考えている。

それでは、どのようにしてそのような居場所を知ることが出来るのかということが課題になるのだが、京都市ではどの程度の居場所があるのか。

和田課長：例えば、子ども食堂や学習支援であれば、市内に約80箇所あるように、子どもの年齢層は充実しているが、中高年の層は十分ではない。

中川委員：アートスクールやアートサークルを作るのではなく、ひきこもりの方の居場所や子ども食堂などにアーティストが出向き、NPOの方たちと共同して実施していくことになる。アーティストと繋がるための情報がないため、相談窓口を作り、繋がりを作っていければと考えている。

三木委員：ひきこもりに関するサークル等で、アーティストとの繋がりを持ちたいとなった場合に、その場を提供するシステムを作ることと理解した。

岡田会長：SW/ACは、どこで立ち上げ、どういった活動をされているのか。

中川委員：まだオープンではないが、東九条地域で6月17日から開始する予定であり、地域や行政に呼び掛けていくなど、アートの可能性を伝えていきたい。

今までは、偶然、アートに繋がる方向に話が進んだ事例があったが、今後は、アートを当たり前のものとしていけるような情報発信を戦略的に行う必要がある。アートは、美術館やギャラリー、劇場だけでなく、生活のすぐ横にあるもの

だとの理解を深めていきたいと考えている。

岡田会長：これまで福祉分野にはなかったジャンルとして重要な開発であり，興味深い話である。

小野委員：分かっているだけでいい，知っていればできると考えている方がとてもたくさんいる。就労支援や学習支援の施策はたくさんあるが，上手に使えているかという点，なかなかそうではない。ひきこもりの方が施策を上手に使うことは難しく，サポートのために支援員がいるのだと思う。分かっているだけでいいと考える方に対し，やり方を一緒に考えることや，現在ある施策を使いやすく，有効に活用できる方法を議論できるようなネットワークであってほしいと感じた。

源野委員：壮年期の居場所や社会参加の方向性を示していただいているが，アートも含めた居場所の役割を果たしていくために，まずは，そこにどのように繋ぐかが大切である。支援が必要ない人であれば，自分で居場所を探すことができるが，支援が必要な人の場合は，居場所に繋げることが難しい。ひきこもりの40代，50代の子と同居する高齢の親が施設に入所した場合，子ひとりでは経済的に困窮する事例があり，就労できなかったために，経済的自立が問題となることがある。

高齢者を支援する高齢サポートとしては，壮年期に特化した居場所というよりも，高齢者の居場所の中に，ひきこもりの方もそこに参加するとか，役割を担う等の方がイメージしやすい。また，社会参加や就労に至るまでの支援が手厚くても，その後の支援がないことがある。

支援の手法について，効率的・効果的にどうするかは，継続的な検討が必要であるが，壮年期の支援に向けた居場所づくりに取り組むことについては賛成である。

岡田会長：重い精神障害やひきこもりの事例に関わったが，特定の居場所ばかりに頼ると，その後が課題になる。初めのステップアップとするための通過点にすることはいいが，それ以外の居場所も見つけて，自分の役割を見つけることが大切である。そのような居場所に繋がれるよう一緒になって支援する人が必要であり，方法についていろいろ試行錯誤しながら，考えていきたい。

(3) 京都市におけるひきこもり支援に係る意見（京都市社会福祉審議会委員照会） とりまとめ結果について

小澤課長：(資料説明)

大澤委員：子どもが学校に行けなくても，親がPTA活動に参加していることもある。しかし，一保護者としては，その親に対して子どものことは聞きにくいので

で、学校と連携する必要がある。ひきこもりの方は、小・中学校から不登校が続いていることが多い。行政や地域全体でしっかりと取り組んでいく必要がある。

岡田会長：資料にある「キーマン」という言葉について、「キーパーソン」と言い換えていただけないか。また、「受け皿」という言葉も、受け身な感じがある。ひきこもりの当事者が、本来の力を発揮するためにも、前向きな言葉に置き換えていただきたい。「受け皿」という言い方が独り歩きする可能性がある。お示しいただいているひきこもりに対する理念は素晴らしいと思う。

中川委員：資料2に、解決パターンという言葉があるが、そもそもパターン化することは難しいのではないか。

久保局長：ひきこもりの事例を十分に積み重ねている訳ではなく、パターン化できるかどうかを考えていかなければならない。社会福祉の分野では、いろいろな事例を積み重ねて支援手法を見出してきた経過がある。その中で、何ができるとしっかりと分析して広めていくことが重要である。組み合わせも取り巻く状況も違うが、共通のツールがあれば、今後の支援に役立つと考える。

源野委員：局長の言われたとおりであり、私たちが支援する中でも、過去に関わった経験の積み重ねが将来につながっている。我々は「支援モデル」と呼んでいる。

三宅局長：熱心に御議論いただき、感謝する。本日は、ひきこもり支援に係る社会資源の役割やネットワークの構築等について議論していただいた。委員の皆さんのお話をお聴きして、社会資源にはいろんなパターンがあり、中川委員のार्टを使った社会資源をはじめ、ひきこもり当事者が活動や役割を見つける場所、単に在るだけの場所でないとの御示唆であったと思う。その中で、ひきこもり状態の方が改めて自身の価値を認識できるよう、社会資源があるべきと教えていただいた。

ネットワークの役割については、既存の施策もうまく活用していくことが必要である。また、社会資源をどのように活用するのか、ひきこもり支援だけの居場所でもいいのか、高齢者サロンなどいろいろな人が集まるコミュニティの場を変えていく、充実していくことをネットワークの中で検討していくことが重要との御議論だったと理解している。

ひきこもり支援については、試行錯誤の中、検討しているところであるが、関係機関としっかりと連携を取りながら、次回には意見具申案を取りまとめていきたいと考えているので、引き続き御協力をよろしくお願ひしたい。